

平山郁夫・シルクロード画家としての出発点 —東京藝術大学トルコ、カッパドキア洞窟遺跡調査の壁画は今—

松崎 哲 平山郁夫美術館シルクロード特任研究員

Hirayama Ikuo, The Beginning as the Silk Road Painter: The Present Conditions of Mural at the Cave Ruins in Cappadocia, Turkey Investigated by Tokyo University of the Arts

MATSUZAKI, Satoshi Specially Appointed Researcher for the Silk Road, The Hirayama Ikuo Museum of Art

平山郁夫・シルクロード画家としての出発点—東京藝術大学トルコ、カッパドキア洞窟遺跡調査の壁画は今—

1. はじめに

日本画家・平山郁夫(1930～2009年)は、1968年からシルクロード各国を訪問し、現地の風景や人物などを独特の画風で描いた作品が高い評価を得たことから、いわゆるシルクロード画家と称された。そして、その出発点となったのが、柳宗玄を中心に1966年、68年、70年の三次にわたって実施された東京藝術大学中世オリエント遺跡学術調査団(以下「調査団」と記す)によるトルコ国カッパドキア地方での中世キリスト教洞窟壁画調査への参加であった。平山は第一次調査団の模写班として、カッパドキアのウフララ(図1では「イヒララ」と表記)渓谷に所在する8世紀頃から13世紀頃にかけて描かれた洞窟壁画の模写制作に携わった。

2. カッパドキア・ウフララ渓谷遺跡の洞窟

カッパドキア(図1)といえば、キノコ岩やラクダ岩

などのあるギョレメ(図1では「ゲレメ」と表記)国立公園の奇岩・洞窟風景が有名であるが、合わせて、その洞窟内に描かれているキリスト教会のフレスコ画なども文化自然複合遺産として世界遺産に登録されている。平山の調査は、ギョレメ地区でも行われたが、主要な調査地はギョレメから西南約120kmに位置するウフララ渓谷であった(平山らは当地を「イヒララ」と呼んでいた)。この一帯はなだらかなアナトリア高原が続くなかで、突然高さ約100mの断崖が全長約12kmにわたって続く渓谷(図2)である。その切り立った断崖には、現在、105ほどのビザンチン時代のキリスト教の洞窟教会が確認され、そのうちの約30の教会内に壁画が見られるという。平山は、渓谷内に所在するウフララ村とベリスルマ(図1では「ベリスルマ」と表記)村に約4か月間滞在して「臭う教会」、「ヒヤシンスの教会」、「埋もれた教会」の3か所の洞窟教会(図3)にある壁画の模写制作を行った。そ



図1 カッパドキア周辺図『カッパドキヤ』(鹿島研究所出版会)より転載



図2 カップパドキア・ウフララ渓谷 2010年撮影：筆者



図4 臭う教会 2010年撮影：筆者



図3 平山が壁画模写した洞窟教会位置図

して、その成果品には、「臭う教会 使徒たち」、「ヒヤシンスの教会 聖メナス」、「ヒヤシンスの教会 シメオン」、「ヒヤシンスの教会 聖トリフォン」(当初の作品名は「炉中の三青年と聖トリフォン」)、「埋もれた教会 キリストの磔刑、よみに下ったキリスト、聖女たちの前に現われたキリスト」の5点がある。

では、その3か所の洞窟教会の壁画について、平山の模写作品とともに、筆者が2010年と2014年に現地で見つけた壁画の状態とを対比して見てみよう。

3. 「臭う教会」の壁画の現状

「臭う教会(コカル・キリッセ)」は、ウフララ地区のメレンディズ川左岸に位置する。その名については、かつて洞窟内に葬られた人骨の断片がいまだに散在していて妙な臭いがするので、地元の人たちがそう呼んでいるのだという。

洞窟は川辺から約10m上方にあり、たどり着くには岩だらけの斜面を這うようにして上らなければならない。本来の洞窟教会は二層構造で、壁画があるのは上層部分だが、現在はそこに直接入れるようになっている。祭室前部は既に崩壊しており、そこに金属製の扉が設置されている(図4)。扉を入ると身廊部が続き、その奥に墓室が2つ設けられている。いずれも天井は

かまぼこ型構造である。壁画は長さ約5mの身廊部の天井と壁面にびっしりと描かれている。入口に近いが、保存状態は壁面下部を除きおおむね良好で、図像も鮮明である。

天井部には「キリストと四天使」、「巨大な十字架」の二大画像と、その十字架に隣接する左右曲線の壁面に各6人ずつが並ぶ十二使徒が描かれている(図5)。それらは他に類のないほどの大構図で、ウフララ壁画群の代表作の一つと言えるものであろう。

平山がモチーフとしたのは、「十二使徒」で、身廊の天井部近くの左右壁面に各6人ずつ並ぶ12人の使徒のうち、奥に向かって左側の4人を模写している(図6)。平山の脳裏には、調査に来る2年前に制作した《求法高僧東帰図》(1964年・平山郁夫美術館蔵)の構図が思い浮かんだのかもしれない。平山は、緑地の背景に白、灰、桃色などで調和よく描かれた壁画を現状模写しているが、約半世紀を経過していても、身廊の上部に位置していたことから、人的損傷や自然崩壊から免れ、ほぼ当時のままの状態で残存していた。

4. 「ヒヤシンスの教会」の壁画の現状

「ヒヤシンスの教会(スムビュルル・キリッセ)」は、洞窟周辺にヒヤシンスの花が咲いていたので、そう名付けられたという。ファサードを有する二層構造である(図7)が、その上層に位置する身廊と祭室は、意外と小ぶりである。上層部の入口は、かつては窓だったようで、現在はそこに扉が設置されている、しかし、身廊部へはさらにその奥にある空いた穴から入れるようになっている。身廊・祭室の長さは約5mで、教会の全体構造からするとかなり狭い。そして、その各室の平天井部と側壁部に天使や聖人の像などが描かれ、なかでも身廊部の壁画は聖人像がほとんどである。

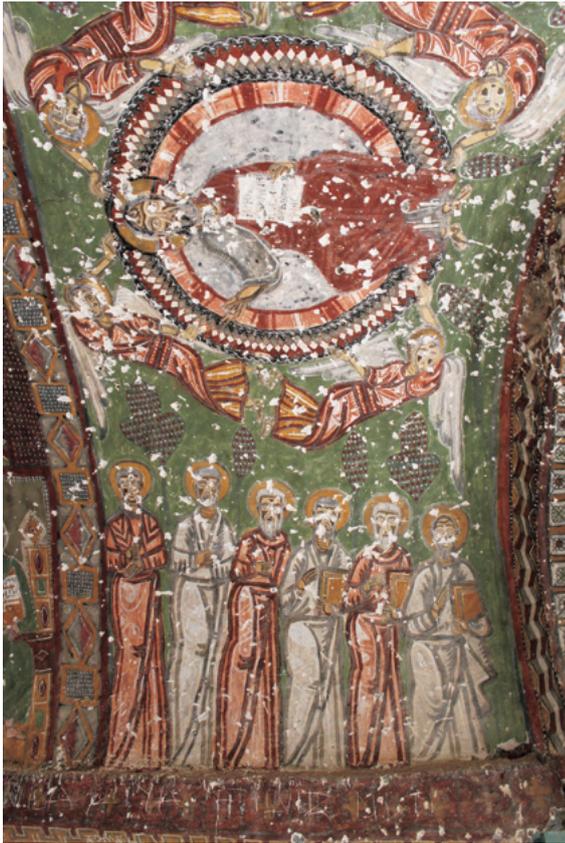


図5 「使徒たち」の壁画 2010年 撮影：筆者

平山は、そのなかの平天井に描かれた「聖メナス」、壁面上部の「聖トリフォン」、そして、反対側の翼廊部に見られる新約聖書のキリストの誕生から復活までを表した説話図像の中の神殿奉獻に描かれた「聖シメオン」の三つの図を模写している。それらは、いずれも顔や衣を纏った身体の描写に、筆を幾つも重ねて立体感を出そうとしているのがうかがわれる。平山はその構図に強く惹きつけられたようである。平山は、1950年代から《仏教伝来》(1959年・佐久市立近代美術館蔵)、《建立金剛心図》(1963年・東京国立近代美術館蔵)、《求法高僧東帰図》(1964年・平山郁夫美術館蔵)など一連の仏教をモチーフとした作品を描いてきたが、そうした釈迦や僧侶の姿が、異教のキリストや聖者の姿にも合い通じると感じたからなのかもしれない。

平山が模写した「聖メナス」(図8)をはじめとする壁画は、背景がすべて青灰色で、いずれも茶色や白色の枠内に描かれている。人物像は平塗りだが、茶色や桃色などを使った筆で塗り重ねられている。また、顔もほかの洞窟壁画とは異なり、割りど写実的に描かれている。壁画の現状を個々にみても、一つ目の「聖メナス」は、平天井部に描かれているため、比較



図6 【模写】臭う教会 使徒たち 平山郁夫(模本制作) 1967年 東京藝術大学所蔵



図7 ヒヤシンスの教会 2010年 撮影：筆者

的状态は良好だが、顔の部分の剝離や服装の部分での褪色が進んでいた(図9)。二つ目の「聖トリフォン」(図10)はその上部の旧約聖書にある「炉中の三青年」のうちの左側二人の人物とともに模写していた。側壁上部にあるため、ほぼ模写と同じ状態のままであった。しかし、平山の模写も淡い色彩で描かれていることから、このときすでに褪色がかなり進んでいたであろう。また、破壊された顔の部分は当時と同じ傷のままであった(図11)。そして、三つ目の「聖シメオン」(図12)は、明り取りの窓に近く、雨水や風の影響を強く受けたためか、平山がモチーフとした壁画のなかでは損傷がもっとも著しかった。人物周辺の壁画はほとんど剝落し、人物の部分も剝落寸前まで顔料が浮き



図8 【模写】ヒヤシンスの教会 聖メナス 平山郁夫(模本制作)1967年 東京藝術大学所蔵



図10 【模写】ヒヤシンスの教会 聖トリフォン 平山郁夫(模本制作)1967年 東京藝術大学所蔵



図9 「聖メナス」の壁画 2010年 撮影：筆者

上がっていた。さらに、聖シメオンの姿はほとんど見えないくらい褪色していて、背中中の描線からかろうじて判別できる状態(図13)だったため、見つけるのに少し時間を要した。

5. 「埋もれた教会」の壁画の現状

「埋もれた教会」は、前述の2つの教会があったウフララ村から3kmほど北のベリスルマ村にあり、当時、入口が崩れ土石で埋もれていたため、村人がそう呼んでいたそうである。その名が示すとおり、平山の



図11 「聖トリフォン」の壁画 2010年 撮影：筆者

模写を現地の学芸員に見せても、「こんな洞窟はまったく知らないし、壁画もみたことがない」という始末であった。途方に暮れていると、たまたま谷間のチャイハナにいた一人の老人が、「この壁画なら若い頃に見たことがある」といって、少し離れた崖の中ほど辺りを指さしてくれた。そこは、これまでのような溪谷の谷底にある洞窟とは異なり、小高い村に通ずる道路近くの崖に突き出た岩肌にあった。当時、平山は調査



図12 【模写】ヒヤシンスの教会 シメオン 平山郁夫
(模本制作)1967年 東京藝術大学所蔵

隊のメンバーと別れてこの村に約1か月滞在し、一人だけ洞窟にこもって作業をした。

教会の入口付近の洞窟部分は、村から近いせいか、地元の人が納屋か作業小屋に今も使っているようである(図14)。洞内に入ると左手奥にかまぼこ型の身廊と祭室とを合わせて長さ約5.5mの教会がある。構造は、これまで見たなかでもっとも小ぶりで単純なものである。壁画はかなり損傷を受けていて、人物の顔面にはほとんど突き傷や削り落とされた痕があった。しかし、壁画全体の構図はダイナミックで、色彩も鮮やかである。

平山を魅了した壁画は、身廊天井部の左右いっばいに描かれたキリスト伝の諸場面であった。南壁の左から「お告げ」、「降誕」、「神殿奉献」、北壁に移って左から「磔刑」、「黄泉に下る」、「聖女たちの前に現われたキリスト」と続いている(図15)。これは新約聖書のキリストの誕生から復活までを表したもので、平山は、「キリストの磔刑、よみに下ったキリスト、聖女

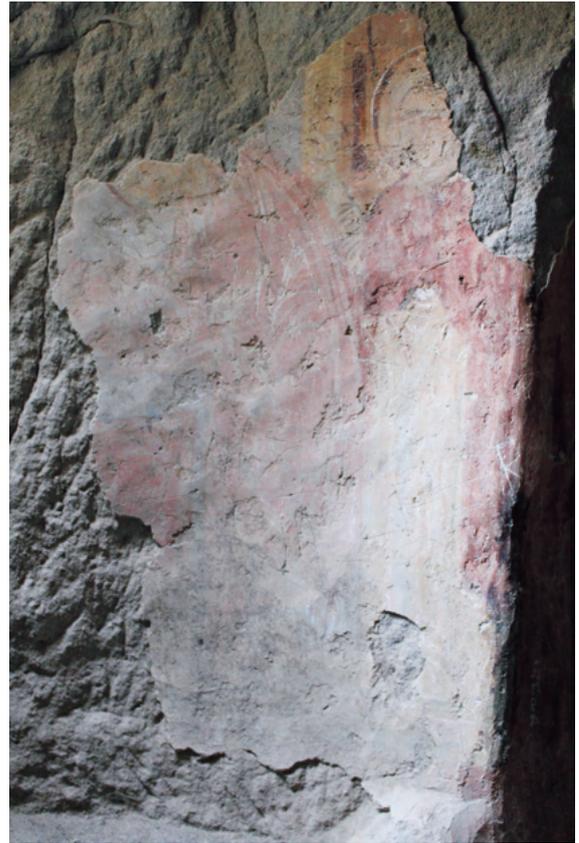


図13 「シメオン」の壁画 2010年 撮影：筆者



図14 埋もれた教会 2014年 撮影：筆者



図15 「キリストの磔刑、よみに下ったキリスト、聖女たちの前に現われたキリスト」の壁画 2010年 撮影：筆者



図16 【模写】埋もれた教会 キリストの磔刑、よみに下ったキリスト、聖女たちの前に現われたキリスト 平山郁夫(模本制作)1967年 東京藝術大学所蔵

たちの前に現われたキリスト」と題し、北側の壁画を模写している(図16)。その選択は推測であるが、平山がここを訪れる以前の1960年代初期に描いた《受胎霊夢》(1962年・広島県立美術館蔵)、《行七歩》(1962年・平山郁夫美術館蔵)、《入涅槃幻想》(1961年・東京国立近代美術館蔵)、《出現》(1962年・佐久市立近代美術館蔵)など一連の仏伝画と合い重なり、滾る思いが沸き起こったからであろう。だからこそ長期間の孤独な作業にも没頭できたと思われる。

6. おわりに

平山は、1959年に「仏教伝来」を描いて以来、一連の仏伝画により日本画家としての地位を確立したが、このウフララ渓谷での生活体験が、のちにいわゆるシルクロード画家として歩みだす出発点となった。そのことを平山は、後年、次のように記している。「キャンプから荷物を担いで、岩山を登ったり、渓谷に下りたりして毎日通った。四ヶ月を過ごし、単調に思われた砂漠だが、様々に変化することを少しずつ知った。この経験が後年、私がシルクロードの風物を描く時の基礎となった」(平山 2000)。また、「自分だけのものを、三ヶ月滞在したイヒララ村で見いだした。見つけたのは、〈色〉であった。オリエントの色ともいえるべき色彩に出会ったのである。その色は、濃紺であった。群青を濃くした紺である。…(略)…故郷瀬戸内での体験であるが、光が十分に照射するところは透明である。水でも海でも空でも、透明感に満ちている。しかし、光が段々と届かなくなってくると暗くなっていく。夕暮れ、陽が落ちて光が消えていくと、空は濃紺に変わっていく。朝でもまだ陽の昇らない空は濃紺である。

その色が、私のいうオリエントの色なのである」(平山 2001)。

平山が調査に入って、洞窟壁画の模写を行ってから60年近くが過ぎた。現地は1985年に世界遺産に登録され、観光地としても賑わい、洞窟の保護・整備が進められている。しかし、当該地区の本格的な調査報告は、長年トルコ国内で発掘調査・研究に携わっている中近東文化センター・アナトリア考古学研究所長の大村幸弘氏によると、「未だ東京藝術大学の調査団の報告を凌駕する内容のものは出ていない」(大村 2000)と言う。そうしたなか、風化や雨水等による洞窟内の壁画の自然劣化が顕著な洞窟も見られる。また、「埋もれた教会」のように、現地の学芸員も未だ知らない洞窟も存在している。シルクロード画家として名を馳せた平山は、その後、国内外の文化財保護活動にも尽力した。平山がかつて模写を行った洞窟壁画の今の状態を目にしたとすれば、何を感じたであろうか。今後、本格的な全体調査とそれに伴う保護・整備がなされることを願うばかりである。

■参考文献

- ・大村幸弘 2000『世界歴史の旅 トルコ』 山川出版社。
- ・平山郁夫 2000『永遠のシルクロード』 講談社。
- ・平山郁夫 2001『シルクロード巡礼 玄奘三蔵 祈りの旅』 日本放送出版協会。
- ・平山郁夫美術館(編)2013『トルコ共和国建国90周年記念展 平山郁夫 トルコの世界遺産を描く』4-9頁。
- ・松崎 哲 2013「平山郁夫 トルコの世界遺産を描く」『アナトリアニュース』136号 21-23頁 日本・トルコ協会。
- ・柳 宗玄 1967『カッパドキヤ』11頁 鹿島研究所出版会。
- ・柳 宗玄 1971「洞窟修道院とその壁画」『トルコ中世壁画展 秘境のキリスト教美術』東京藝術大学中世オリエント遺跡学術調査団。